

國學院大學學術情報リポジトリ

井上ひさしの作品における一葉像：
『頭痛肩こり樋口一葉』を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崔, 雪婷 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001596

井上ひさしの作品における一葉像

—『頭痛肩こり樋口一葉』を中心に—

Ichiyō Higuchi's Image in Hisashi Inoue's works:

Focusing on *Zutsuu katakori Higuchi Ichiyō*

崔雪婷

キーワード: 樋口一葉像 井上ひさし 『頭痛肩こり樋口一葉』 劇文学 読者受容理論

关键词: 樋口一葉形象 井上厦 《头痛肩疼的樋口一葉》 戏剧文学 读者接受理论

要旨

樋口一葉(1872-1896)は日本近代以降作家を職業とする最初の女性として、日本近代文学を切り開いた小説家と評価されている。『頭痛肩こり樋口一葉』は井上ひさし(1934-2010)が執筆し、1984年に初めて上演された樋口一葉を主人公とする演劇である。

従来、樋口一葉は貧困の中で夭折し、薄幸の作家であるという暗いイメージが強い。本稿は、井上ひさしにとっての一葉像を深く理解し、さらに従来の一葉像とのズレを見出し、一葉はどのように理解されているのかを考察するものである。

一般的に樋口一葉を悲劇的天才女流作家として取り扱われているのに対して、井上ひさしは、これまではあまり注目されなかった樋口一葉の明るい一面を捉えた。本研究は『頭痛肩こり樋口一葉』の関連事項を紹介したうえで、具体的にテキストからどのような一葉像が伺えるかということを中心に、さらに井上ひさしの一葉像に託したことを考察してみた。新しい視点を採用し、劇文学における新たな一葉像を明らかにすることによって、一葉研究の多様化を目指している。

摘要

樋口一葉(1872年-1896年)是日本近代首位职业女作家,享有近代批判现实主义文学开拓者的盛誉。《头痛肩疼的樋口一葉》是井上厦(1934年-2010年)创作的以樋口一葉为主人公的戏剧作品,于1984年首次公演。

由于樋口一葉一生生活贫困困顿,且英年早逝,大多给人留下薄幸作家的印象。拙稿在深刻理解井上厦笔下的樋口一葉形象的基础上,揭示这一创新形象与以往樋口一葉形象的不同之处,并且对于樋口一葉是如何被井上厦解读的这一问题予以考察。

尽管樋口一葉通常被当作具有悲剧色彩的天才女作家来解读,但井上厦却捕捉到了至今为止未曾成为主流认识的、樋口一葉积极面对磨难、性格豁达乐观的一面。本研究在介绍了《头痛肩疼的樋口一葉》的相关内容基础上,分析了《头痛肩疼的樋口一葉》中樋口一葉的具体形象,阐释了井上厦在这样崭新的樋口一葉形象中所寄寓的深意。本研

究采用了崭新的视角，对井上厦对樋口一叶的认知，并在此基础上，为樋口文学的研究提供更多的可能性，使一叶研究更加多样化。

はじめに

(一) 問題提起と研究の目的

日本の小説家樋口一葉(1872年-1896年)について読んでいくと、井上ひさしの演劇『頭痛肩こり樋口一葉』が目に入った。既成の一葉イメージとかなり異なるような一葉像が作られているため、一葉がどのように読まれてきたかという問題意識を持つようになり、井上ひさしの一葉像を明らかにしたく、『頭痛肩こり樋口一葉』を研究対象にしたゆえである。井上ひさしは樋口一葉について、『頭痛肩こり樋口一葉』のほかに書いたものも残している。具体的には、1984年に初めて上演された井上の演劇『頭痛肩こり樋口一葉』で描写される一葉像を分析し、また1995年に出版された随筆集『樋口一葉に聞く』などのテキストも考察に入れようとする。井上ひさしにとっての一葉像を深く理解し、さらに従来の一葉像とのズレを見出し、日本において一葉はどのように理解されているのかを検討してみたいと思う。

本研究において、新しい視点を採用することによって、作家像の本質を前景化する。つまり、劇文学における新たな一葉像を明らかにすることによって、一葉研究の多様化を目指し、新たな可能性を試みようとするのである。

(二) 先行研究

樋口一葉の文学に関する研究と井上ひさしに関する研究は少なくないが、『頭痛肩こり樋口一葉』に関わる研究は、極めて少ないと言える。筆者の調べた限りでは、中国においてはまったく見当たらない。日本においては国立情報学研究所のデータによると、18件のみである。そのうち、7件は『悲劇喜劇』という雑誌に発表したもので、4件は『テアトロ』という雑誌に発表したものである。いずれも文芸誌であるため、掲載されたのは論文というより、劇評の方が多いということがわかった。井上ひさしの一葉に関する作品を対象とする研究では、樋口一葉のイメージを研究対象としたものはほとんどないと言える。ただ一つだけ挙げられるのは、2012年に日本近代演劇史研究会編集の『井上ひさしの演劇』に収録

された鈴木彩氏が書いた「頭痛肩こり樋口一葉——薄幸なく女性>作家像への批評」⁽¹⁾という論文である。

『頭痛肩こり樋口一葉』に関わる研究のほとんどは劇評や評論に止まり、井上ひさしの創作意図や作品のテーマを明らかにしようとするもので、人物像についての分析はあまりないと言える。これまでは一般的に樋口一葉といえば薄幸のイメージが強い。時田(2016)は「井上ひさしはそうは捉えない」⁽²⁾と指摘しているが、井上ひさし演劇の独創性に対する分析に止まっており、新たな一葉像に関する分析はしなかった。さらに、『頭痛肩こり樋口一葉』が初めて上演されたあと、宮岸(1984)は「明るい遊女たち」をテーマとして、井上演劇における一葉像の「明るさ」を強調したが⁽³⁾、堂本(1984)は時代閉塞の重荷を担った女性という一葉像を演劇全体の基調として取り上げた⁽⁴⁾。野間(1988)は考証的な研究方法で、『頭痛肩こり樋口一葉』が樋口一葉の伝記的事実を骨格にした演劇と結論づけた⁽⁵⁾。しかしながら、井上ひさしの一葉像の独創性を無視しているようにみえる。『頭痛肩こり樋口一葉』における新たな一葉像についてはこれまでの研究で、あまり言及されていない。以上のような一葉イメージに関する研究の不十分に鑑み、本稿は独自の観点から、井上ひさしの「一葉像」を検討してみたいと思う。

本稿では、井上ひさしの『頭痛肩こり樋口一葉』で描写される一葉像に焦点を当てて、樋口一葉の新たなイメージを探究し、樋口一葉の読者としている井上ひさしがどのように一葉像を捉えるかを考察し、一葉受容の側面を明らかにしたい。

(三) 研究方法

本稿は「読者受容の理論」から多大な示唆を受けている。本稿では、脚本の作者である井上ひさしもまた樋口文学の読者であることを意識しながら、井上の一

-
- (1) 日本近代演劇史研究会編. 鈴木彩. 「頭痛肩こり樋口一葉——薄幸なく女性>作家像への批評」. 『井上ひさしの演劇』. 翰林書房, 2012年12月1日, 第1刷。
 - (2) 時田浩. 女性6人のドラマ: 井上ひさしの『頭痛肩こり樋口一葉』. 『京都産業大学論集. 人文科学系列』, 2016年第49編, P267。
 - (3) 宮岸泰治. こまつ座「頭痛肩こり樋口一葉」——明るい遊女たち(劇評). 『テアトロ』, 1984年第496編。
 - (4) 堂本正樹. 頭痛肩こり樋口一葉(井上ひさし・その言語宇宙の魅力<特集>)——(ドラマの世界・作品論). 『国文学解釈と鑑賞』, 1984年第49編第10号。
 - (5) 野間正二. 井上ひさしの「頭痛肩こり樋口一葉」の世界. 『人文論集』, 1988年第24編第1号。

葉理解をどのように脚本に織り込んだのかを明らかにしたい。

研究方法として、テキスト分析は主としているが、ジャンルを跨るような研究方法も使うことにする。一葉像を追求するにあたり、一つの文学作品にこだわるのではなく、井上ひさしの演劇や随筆のほか、実際の一葉の年譜や日記なども研究対象としつつ考察していく。具体的には、井上ひさしの演劇『頭痛肩こり樋口一葉』の脚本と、随筆『樋口一葉に聞く』という架空のインタビューをもとにした作品と、実際の一葉の年譜、日記、手紙、小説、伝記などと比較検討して、研究を進めたい。また、樋口一葉の一般的なイメージに対する従来の批評と『頭痛肩こり樋口一葉』の舞台を見た観客の感受性の差異についても提示する。

第一章 『頭痛肩こり樋口一葉』の周辺

(一) 樋口一葉という実在の作家

樋口一葉、本名樋口なつ。戸籍上は「奈津」と記されるが、夏子とも書かれる。明治五年（一八七二年）旧暦三月二十五日（新暦五月二日）に、当時の地名で東京府第二大区一小区幸橋御門内（現在の千代田区内幸町）にあった東京府庁の官舎で、父則義、母たきの次女として生まれた。

七つといふとしより草々紙といふものを好みて、手まり、やり羽子をなげうちてよみけるが、其中にも一と好みけるは、英雄豪傑の伝、仁俠義人の行為などの、そゞろ身にしむ様に覚えて、凡て勇ましく花やかなるが嬉しかりき。かくて九つ斗の時よりは、我身の一生の世の常にて終わらむことながかはしく、あはれくれ竹の一ふしぬけ出でしがなとぞあけくれに願ひける。されども其ころの目には、世の中などいふもの見ゆべくもあらず。只雲をふみて天にとゞかむを願ふ様成りき。其頃の人はみな、我を見ておとなしき子とほめ、物おほえよき子といひけり。父は人にほこり給へり。⁽⁶⁾

上記は、一葉自身が日記の中に描いた幼年の自己像と考えられる。樋口一葉の父則義は、甲州（山梨県）の農民の長男だったが、農民の生活に飽き足らず、武

(6) 樋口一葉、『一葉日記(抄)』。新潮社、1966年7月30日、十八刷、P121。

士になろうという志を立て、古屋氏の娘たきとともに江戸に出府した。母のたきは長女ふじを出産後に、旗本稲葉大膳の娘である鑛の乳母として奉公した。則義は、苦勞して農民から武士へと身分をあげたが、一八六八年に江戸幕府の崩壊によって、その社会的地位を失った。明治維新後は東京府の役人になり、警視庁などに勤務したが、長男泉太郎が肺結核で病死すると、精神的に打撃を受けてその二年後に亡くなった。それは一葉が十七歳のときである。『頭痛肩こり樋口一葉』で描かれる時期は、一葉の父が死んだ翌年からのことである。また劇中、稲葉鑛も登場する。

樋口一葉の最終学歴は下谷区上野元黒門町にあった私立青海学校小学高等科第四級である。母のたきの意見で「女子にながく学問をさせなんは行々の為よろしからず。針仕事にても学ばせ、家事の見ならひなどさせん」⁽⁷⁾と一葉は十二歳で学校を退学した。その後、自ら日記に書いていたように、学歴問題は、ずっと一葉を悩ませた。このことは『頭痛肩こり樋口一葉』の第五幕に描かれている。

母に強いられて私立小学校を退学させられた一葉は、十四歳で歌の塾「萩の舎」に入門し、和歌を勉強していたが、父や長兄が死んでしまい、次兄の虎之助は母との折り合いが悪くて家から出て分籍してしまい、一葉が家を継ぐ戸主にならなければならなかった。父の死により樋口家が没落すると、渋谷三郎との婚約は破棄され、家計が困窮を極めた。そのため、一葉は中島歌子の塾「萩の舎」に内弟子に入り、小間使いと同然に扱われた。これらのことは『頭痛肩こり樋口一葉』のはじめ、演劇の第一幕の背景となっている。

家族を養うために、小説を書けばお金になるという強い希望を抱いた一葉は、十九歳の時に、自活するために、職業作家をめざし、新聞小説記者半井桃水に師事した。しかし、恋心を抱いた小説の師の半井桃水と男女の仲を噂されたことから、決別を余儀なくされた。やがて、商売も失敗し、貧しい町に移り住んだ一葉は、わずかな金で身を売る女性と知り合った。社会の底辺で懸命に生きる女性たちの心の声に耳を傾けると、一葉に新たな小説の構想が芽生えた。

一般的に「奇跡の十四ヶ月」と呼ばれる時期において、一葉はまずは代表作の一つ「大つごもり」を、翌年の明治二十八年（一八九五年）に小説「たけくらべ」、「にごりえ」、「十三夜」などの名作を次々と世に送り出した。明治二十九年（一八

(7) 樋口一葉、『一葉日記(抄)』。新潮社、1966年7月30日、十八刷、P121。

九六年)十一月二十三日)に肺結核で亡くなった樋口一葉は、日本の近代文学を切り開いた小説家と評価されている。

(二) 劇作家井上ひさしの一葉に対する関心

日本の劇作家である井上ひさし(1934年-2010年)は、樋口一葉のほかに、夏目漱石、太宰治、菊池寛、宮沢賢治、石川啄木、そして小林一茶など実在の小説家や詩人、歌人を取り上げた演劇を多く創作した。

上智大学在学中から、浅草のストリップ劇場フランス座を中心に台本を書き始めた井上ひさしは、1983年1月に創立された「こまつ座」の座付作家となった。「こまつ座」は井上ひさしの作品のみを専門に上演する演劇制作劇団であり、創立された翌年の1984年には『頭痛肩こり樋口一葉』で旗揚げ公演を行った。1986年には、『頭痛肩こり樋口一葉』は東宝・こまつ座提携特別公演として芸術座で上演された。2013年には、こまつ座第100回記念公演で栗山民也の新演出版を上演して好評を得た。そして2016年の夏は、樋口一葉没後120年記念にあたり、栗山民也が演出して、永作博美(一葉役)が主演する『頭痛肩こり樋口一葉』が公演された。

『頭痛肩こり樋口一葉』は井上ひさしが五十歳の年に執筆した戯曲である。初演の演出は木村光一が担当し、それ以来、何度も繰り返して再演される人気作となっている。上演回数の多さと観客の好評からみれば、『頭痛肩こり樋口一葉』は既に井上ひさしの代表作となっている。

樋口一葉は近代化のトップに登場した女流作家です。井上ひさしが一葉を選んだのは、「書く」という覚悟と日本語の情感のきめ細かさと細部の表現のたしかなさ、そして明治という時代に、運命の非情さと向き合わなければならなかった女性たちの深淵を見事に書いた一葉文学への畏敬の気持ちがあったからではないでしょうか。⁽⁸⁾

このように、劇団こまつ座代表取締役社長、井上ひさしの三女である井上麻矢は、2016年公演プログラムのまえがきで述べている。「一葉文学への畏敬の気持ち

(8) 『頭痛肩こり樋口一葉』プログラム。企画：こまつ座 製作：東宝/こまつ座、2016年8月、P2。

ちがあった」という一言は井上ひさしが一葉文学の読者なり、身分を示したと思われるよう。

井上ひさしの一葉像は明るい基調に定められている。コミカルでわかりやすく、そして「大衆性」をもっている井上の脚本『頭痛肩こり樋口一葉』は、新しい一葉像を生み出すことを目指したものだといえよう。

『頭痛肩こり樋口一葉』は全十幕の演劇で、六人の女性だけが登場する。劇中、全体的に、一葉は夏子と呼ばれている。設定場面は、毎年お盆の十六日になると、樋口家が客を迎えることである。樋口家には、戸主の夏子、士族としての誇りを捨てられずに衰える一方の家運のため愚痴ばかりこぼしている母の多喜、そして仕立物だけでようやく暮らしている姉思いの妹邦子の三人が暮らしている。そこへ、多喜が乳母をしていた旧士族の「もとお嬢様」の稲葉鑛と、則義の同僚の娘の中野八重が訪れる。そして、夏子だけ見える幽霊の花蛍も登場した。一葉の晩年を辿って構成されているこの演劇には、一葉が十七歳の時に亡くなった父則義の初盆から、一葉がこの世を去る二年に跨ってめぐる一葉の運命が活写されている。

第二章 『頭痛肩こり樋口一葉』にみる一葉像

(一) 樋口家の戸主としての夏子

井上ひさしは一葉の日記と作品を手がかりとして一葉像を追求し、最初は、一葉の恋愛面を取り上げたかったが、一葉の女心は複雑で描くのが難しいため、女としての一葉の生き方を描くのを諦めた⁽⁹⁾。それゆえ、井上ひさしは「親子関係」⁽¹⁰⁾に焦点をあてて一葉像に迫る。

戸主としての樋口夏子は、『頭痛肩こり樋口一葉』に最初から最後まで生計を立てるため金銭面で苦勞し、そして明治時代の閉塞感に苛まれている。母の多喜と妹の邦子は仕立物と洗濯物でわずかながらも経済的に暮らしを支えているが、夏子は裁縫や洗濯などの世間が認める明治時代の女性に「ふさわしい仕事」に嫌悪

(9) 井上ひさし、こまつ座編、『樋口一葉に聞く』、文春文庫、2003年3月10日、第1刷、P221-222。

(10) 井上ひさし、こまつ座編、『樋口一葉に聞く』、文春文庫、2003年3月10日、第1刷、P222。

を抱いている。

夏子は近眼のため、針仕事などに向いていないと思い、自分にできるほかのことに収入の道を探してみ、小説を書くことに気付いた。夏子は萩の舎同門である田辺花圃が一篇の小説で三ヶ月分の生活費に相当する多額の原稿料を得たことを知り、文筆で生計を立てようと思って、小説家の道へ進むことを決意したのである。戸主として、一家の生計を念頭に置きながら、自らの能力にかなりの自信を持っている姿勢が伺える。しかし、母の多喜は夏子の決意に賛成するどころか、夏子をひどく叱った。

邦子：夏ちゃんが小説を書くそうよ。うんと売れる小説を書くんだって。(中略)

多喜：そうかい。やはりほんとうなんだね。(爆発する) どうしてそうコロコロコロコロ考えが変わるんだね。おまえと較べたら秋の空のほうがまだしもあてになるってものだよ。そういえば、この前は、女学校の教師になるかもしれないって言ってたね。あの話はどうなったんだね。戸主なのだよ(傍点筆者)、おまえは。樋口家の主なのだよ。それなのにそんなに志が弱くてどうするの。わたしの老後、邦子の行く末、お嬢さまの仕合せ、みんなおまえの肩にかかっているというのに……、情けない、心細い、もうなにもかもいやになった。こんなことならおとうさんのお供をして去年のうちに死んでしまえばよかった。

突然、夏子は両手で頭をはさみ、その頭をはげしく振る。

邦子：……ねえさん！

鑛： 夏ちゃん、どうしました？

夏子：痛むんです、頭が(傍点筆者)。割れそうなんです。だれか玄能でこの頭を断ち割ってください。(p.38-39)

長い引用であるが、「戸主」という身分についての認識は、母によって知られたことがわかる。さっと顔色が変わって、そして「戸主なのだよ、おまえは」と爆発した多喜に対して、無言の夏子は心に、戸主のゆえに、思うがままにできないことをはじめてわかった。心の中の葛藤が「戸主」ということばに引っ張られて、

夏子は、家族のために自己犠牲をしなければならないと覚悟した。「戸主」という身分を夏子の「頭痛」に直結させる井上ひさしの設定はいかにも意味深いものであろう。

夏子は父が亡くなる一年前に十七歳にして戸主として一家を担う立場となった。ここに描かれているように、夏子は貧乏な家の生計を維持するために、生活の苦労を実感しており、また、一つの側面として、家庭内部における母の多喜と夏子の考え方の衝突が窺える。そのような状況において、戸主としての夏子は、恋愛において自分の心にしたがうことはできない。

鑛： 男嫌いで聞えた夏ちゃんが一ト目で惹かれるぐらいだから、きっとお顔もいいのね。

多喜：ばかばかしいほどの美男子らしいですよ。

鑛： じゃあ、その先生と世帯を持てばいいのに。

多喜：それはできない相談ですよ。夏子は戸主、りっぱな婿を迎えて、樋口家をたやさぬようつとめなくてはなりません。

鑛： ですからその先生を婿にとる。

多喜：桃水先生は御長男なんです。半井家を捨てるわけには行きません。二人が世帯を持てば、どちらかの家がなくなってしまう。だいたい新聞の小説記者なんて悪にきまっています。まったく飛んでもない話だ。

鑛： なるほどねえ。母親としては、この恋まかりならぬ、ですか。禁じられた恋。夏ちゃんも頭が痛むわけね。(p.46)

多喜と鑛の対話により、夏子が先生である半井桃水に恋心を持っているが、相手は長男なので、家を継がなければならない。戸主である夏子も同じ立場である。結婚すると、どちらかの家がなくなってしまう。多喜も「夏子は戸主、りっぱな婿を迎えて、樋口家をたやさぬようつとめなくてはなりません」とはっきりと言った。しかし、母の意向を全面的に受け入れるわけではなくても、自分なりに生計を立てる道で模索した夏子は、ずっと戸主の責任が自分の双肩にかかっている。

小説のことはあたしにゃわからないけどね、夏子は立派な娘でしたよ。わたしの言いつけをよく守ってくれたもの。(中略)世間からうしろ指さされるようなこともせず、いいえ、それどころか樋口家の家名を高めてくれたもの。(p.174)

いつも夏子に対して不満を抱いている母の多喜も最後には心から戸主としての夏子を認めた。次男の虎之助が十五歳の時に家を出たこと、そして、長女のふじが離婚して再婚したことは、樋口の家門に次々と泥を塗ったのである。このような次男や長女の失態を考えると母の多喜は、夏子の気持ちを押しやり、夏子に厳しい家訓に押しつぶされそうになった。そして、一葉にも自分が樋口家の女戸主としての意識が強くあったと考えられる。

総じて言えば、夏子は戸主という身分に縛られ、明治女性の天地を切り開いたというよりは、ある意味で、世間のルールを破壊せずに、戸主である身分を遵守して、樋口家を守るという行動に出たといえる。自分の運命を左右できない夏子は諦観的で、戸主と職業作家を両立できるように、世間の波に負けないように、ずっと努力している。さらに、「頭痛」によって、象徴されている精神的苦痛は、かえって作家としての一葉を作ったのではなかろうか。

(二) 作家としての夏子

小学校は途中で退学、十四歳で和歌の道に進むものの、兄と父の相次ぐ死で、前節の分析どおり、樋口夏子はたった十七歳で母と妹を養う立場に立たされた。そのため夏子自身が生活のために選んだのは、プロの小説家になることであった。樋口夏子は当時の女性として前例のない分野を切り開き、貧困と戦っているうちに、作家へと成長した。

しかし、作家としての夏子の人生も順調満帆ではなかった。母からの反対、小説の師との決別、そして、明治時代の男尊女卑の思潮の妨げにより、作家である樋口夏子という人物像が作られる。

(小説を)書いてはいるようですがね、ちっとも売れやしません。おまけに半井桃水とおっしゃる小説の方のお師匠さんに一目惚れしてしまいまして、

小説を見せに行っているのやら、桃水先生のお顔を見に行っているのやら、わからないような始末です。もっともこのところは家に落ち着いているようです。(p.45)

上記のように、母の多喜は皮肉を交えて愚痴をこぼしている。夏子が小説を書くことでお金を稼ぐことに不満を抱き、さらに小説を書く仕事によって夏子は頭が痛くなり肩がこって脳に妙な負担がかかる⁽¹¹⁾と母は考えている。そして、師匠の評価と現実の結果は、作家になろうとしている夏子に衝撃を与える。

女： あのと、どうして死のうとなさったの。

夏子：あの日、半井先生に小説をお見せしたんです。読み終えた先生は一言、「こんなものでは商売になりませんよ」とおっしゃいました。わたしにはそれが「いいものが書けないうちはそう気やすく来てもらってはこまる」という意味にきこえあした。(p.54)

幽霊である女との対話から、夏子と半井桃水との関係が伺える。「死のうとなさった」原因として、「いいものが書けない」という恥づかしさをより一層深いのは夏子が自分の行為が師匠の半井桃水に迷惑をかけ、こまらせる意味を捉えるためである。その後、小説の師匠であった半井桃水との関係が醜聞として騒がれ、不本意であったが、夏子は一時半井桃水との交渉を中絶した。それは恋愛の不如意だけではなく、夏子にとって、小説を書いて、文壇に進出する道もふさがれることになってしまった。

半井桃水からの厳しい批判と自分の小説の売れ行きが悪いことから、小説で生計を立てるのはよほど難しそうであると夏子は理解した。生活のために小説家を志した樋口夏子は、文学で生計を立てることに悩まれ、その後、一度「商売にならない」小説の執筆を放棄して、金を稼ぐには現実性の高い商売をやった。食べていけるための手段として貧民街で雑貨屋を開店した夏子は、早朝の買出しをし、妹は店番に立ち、母は家事や雑用を受け持った。夏子は買出しを終えたあと、上野の図書館へ通って、一から文学の勉強をし直した。読書家と努力家の夏

(11) 井上ひさし、『頭痛肩こり樋口一葉』、集英社文庫、1988年11月25日、第1刷、P70-71。

子は、「たけくらべ」、「にぎりえ」、「十三夜」などの作品をこの後執筆することになる。

『頭痛肩こり樋口一葉』の中において、「一葉」という呼び方が出てくるのは二回しかないが、それは夏子の作家像に非常に重要だと思う。

八重：(前略) ……夏ちゃん、いいえ、一葉女史(傍点筆者)、もうあなたはりっぱな小説家、ようござんしたねえ。(p.131)

八重：(前略) 一葉先生(傍点筆者)、あなたは婦人の宿をつくりたいと云ってたわね。そこは静かなところなの？(p.135)

上述のように、一回目は、八重が夏子を「一葉女史」と呼んで、夏子が「りっぱな小説家」になったことを称賛した。「女史」というのは、見識や教養が豊かで、社会的に活動している女性についての呼び方である。二回目では、中野八重が夏子のことを「一葉先生」と呼んだ。生活の圧力をかけて従われる遊女となった八重にとって、夏子はただ単に社会に進出した女性だけではなく、尊敬されるべき「先生」のような存在になる。小説家と認められた夏子は、もう自分が戸主とした「小さい樋口家」から、文壇、あるいは社会という更なる舞台に上がったのである。八重の二回の「一葉」という呼び名の使用は、夏子の身分転換を暗示し、明治時代女性の社会進出の難しさも伺えよう。

小説を書くことは夏子自分が納得できる職業であり、同時に収入が見込める職業であった。このように、自分が誇りに思う仕事をして、なおかつその仕事で家族を養う戸主としての義務を果たそうとする夏子の決意に注目すると、従来にみる暗いだけの一葉像とは違い、一葉像の明るい一面が新たに浮き彫りになる。井上ひさしが『頭痛肩こり樋口一葉』に書いた作家としての一葉像は、明治の天才女流作家という一面だけではなく、様々な困難を突き破って、天分と努力によって、作家として、幸福な生活を送ったという作家像に注目すべきである。

(三) 幽霊が見える諦観の持ち主

『頭痛肩こり樋口一葉』において、もっとも注目されるべきことは幽霊の登場である。お盆はこの世とあの世が繋がっている日で、夏子しか見えない幽霊の花

蛍は夏子とどのような関係があるか。

劇中の夏子は口が重くて、母からの文句をもらっても反駁せずに、従順な娘で、妹に心配をさせないように、なかなか本音をはかないタイプである。そんな無口な夏子は幽霊の花蛍と会話をかわす時は、心の奥に隠されたことを気軽に話し出し、頭も痛くなくなる。

幽霊である花蛍の役割は、上述のように本音を引き出して新たな光を一葉像に照らし、一葉像をより立体的に浮かび上がらせるだけでなく、アイデンティティの面でも、花蛍は夏子のドッベルゲンガーのように描写されている。「一度あの世へ足を踏み入れたことのある人、そういう人にしかわたしが見えない」(p.55)と花蛍は語る。そして、幽霊と呼ばれると気持ち悪くなる「迷える魂」だと自称する。夏子自身もよく困惑し、何度も現実を拒否し、しかし現実にとどまり、諦観の魂が見える。花蛍は夏子の内面としての役割を担い、樋口夏子の死生観を理解する上での重要な登場人物となっている。花蛍と夏子の対話や花蛍の独白から、夏子は死生の前にも諦観の持ち主であることが伺える。

「貧民女学校だの婦人の宿だのと、あなたはふたたび現世に興味を持ちはじめた。そこでその分だけわたしから遠ざかっておしまいになったわ。」(p.106)と花蛍は語っているように、花蛍が夏子に近づきにくい時には、夏子の性格の明るさと心の強さが明らかになる。本音と建前を戦わせながら、夏子のイメージを作り出し、井上ひさしは直接的に描写していないものの、花蛍を通して、つまり花蛍に言わせたり、花蛍が日記を読んだりして、わずか二十四年間の人生を送った夏子の明るい面に対して新たに光を当てた人物像を描き出した。

演出家の木村光一はかつて井上ひさしとの対談でこう言った。

その時の僕は、今考えてみても、「死」が一番恐かった時期じゃないかな。一葉にしても、そうですね。みんな登場人物が喜々として幽霊になっていくでしょ。早く幽霊になった方が勝ちという感じで(笑)。(中略)『頭痛肩こり樋口一葉』の中では、登場人物のひとりひとりが、「生」の時間の中のいろいろな葛藤から次々と「解脱」していきますよね。それが地獄から逃れるのではなくて、切りぬけてゆく姿。⁽¹²⁾

(12) 井上ひさし、『頭痛肩こり樋口一葉』、集英社文庫、1988年11月25日、第1刷、P187-188。

生きている間は、苦しむだけ苦しんだことはなんでもないという発想になる。それゆえ、井上ひさしは死を乗り越える樋口夏子のイメージをつくって、明るい死生観を出すことも観客が『頭痛肩こり樋口一葉』を楽しんで、井上ひさしの一葉像を楽しく受け入れている要因であろう。

井上ひさし作品における一葉像は、ずっと戸主としての責任を自分の双肩にかかって、作家になる理想を抱いて、薄命であるが、明るくて諦観の女性である。井上ひさしが演劇『頭痛肩こり樋口一葉』に作り出した虚像は従来の一葉像と大きな違いがあるが、実はそれは樋口一葉の実像を掘り下げた上で作ったもので、新しい樋口一葉像の創出によって、独自な一葉理解を示していると言えよう。

第三章 井上ひさしの一葉像に託したこと

(一) 井上ひさしにとっての一葉

樋口一葉は、近眼の女性の常で瞳がいつもきらきらと朝露のように輝いており、一重瞼の目元にばらばらとそばかすが散っており、口元はきゅっと締まって小さく、その口から調子の高いきれいな声で江戸弁が飛び出し、言葉使いは明晰である⁽¹³⁾と井上ひさしに造形されている。それは、随筆「一葉に脱帽する」⁽¹⁴⁾に書かれた一葉像であり、井上ひさしが自ら文字で描いた一葉の「肖像画」でもある。ここでは、読書家であり劇作家である井上ひさしは樋口一葉の肖像をどのように復元するか、さらに、井上ひさし本人はどのように樋口一葉という人を理解しているかを検討してみようと思う。

井上ひさしにとっての一葉像は、概して生計と戦う一葉の貧しさ、明治時代の女性を代表する一葉の悲しさ、また、日記より窺える一葉が死ぬか生きていくかに悩まされた苦しさという三点でまとめられると思う。

第一に、一葉が通学している歌塾の「萩の舎」は水戸藩士未亡人の中島歌子が小石川の安藤坂に開いていた私塾で、後世の研究者の間では「明治の宮廷サロ

(13) 井上ひさし。こまつ座編。『樋口一葉に聞く』。文春文庫、2003年3月10日、第1刷、P4。

(14) 井上ひさし。こまつ座編。『樋口一葉に聞く』。文春文庫、2003年3月10日、第1刷、P3-9。

ン」と称される。「石を投げれば爵位持ちの夫人や令嬢に当たるという具合。」⁽¹⁵⁾ 樋口一葉は士族の娘というものの、父は故郷の山梨県の農村を妻とともに出奔し、東京で下級官吏に成り上がったが、いわば農民の身分を自ら否定した流民である。樋口一葉の生涯を振り返ると、ある意味で、一葉は社会の最上層から最下層までを明治の女として体験したと言える。それゆえ、樋口一葉の生活は貧乏と言われるが、貧乏の中にも様々な層があり、それこそ身を売るまで金銭を用立てるほど、貧乏ではなかった。一般的には貧乏の印象が強いが、一葉は最上層から最下層までを自ら体験したり、または身を売られなければならないほど貧乏な女を身近に見たりして、生きていたのである。そして、一葉の目に写っている美しく華麗な生活と自分が背負う暗い生活にまじって、一葉なりの「貧しさ」がよく見えるようになった。

第二に、明治の最上層と最下層を知る樋口一葉は、明治の女性像の全体を見わたすことができる位置に立っていること、特別な位置に立っていることを直感し、その直感を十分に生かして小説を書いたことが、一葉の偉大さと考えられる。しかし、明治全体の女性を代表する一葉は、ただ一人が不幸なわけではない。そして、人間社会の苦悩と失望とを慰めるために生まれてきた一葉にとって、不幸の人生経験はすべて小説家の基本となることを、井上ひさしは指摘している。

第三に、井上ひさしは、一葉が日記を書くことによって小説の練習にしていることを指摘した。すべての日記は真実かどうかはまだ不確定であるが、日記から窺えることは、一葉が死ぬか生きるかを常に悩んでいたことがわかる。『頭痛肩こり樋口一葉』に何回も出てくる場面として、一葉が活着しているうちに自分に戒名をつけて「死者の目」⁽¹⁶⁾ からこの世を見ていたことがわかる。そのような死生観が、一葉の戸主の身分、「萩の舎」で経験する劣等感、母からの迫られる口調、恋心を自ら断ち切ることなどによって、形成されていく。そして、井上ひさしも、一葉が自分に戒名をつけていたことに触れているのは井上自身が初めてであり、これまでの研究にはなかったと指摘している。このことは、一葉研究にはまだまだ掘り出すべきものがあり、また、従来の一葉に関する常識のようなものも見直す必要があることを示唆している。

(15) 井上ひさし. こまつ座編. 『樋口一葉に聞く』. 文春文庫, 2003年3月10日, 第1刷, P6.

(16) 井上ひさし. こまつ座編. 『樋口一葉に聞く』. 文春文庫, 2003年3月10日, 第1刷, P8.

総じて言えば、井上ひさしにとっての一葉は貧しさ、悲しさ、苦しさを持っている女性であるが、薄幸な女性ではない。そのような意味で、井上ひさしが描いた樋口一葉の人物像はまさに従来の世間一般の一葉像と大きな違いがある。井上ひさしは、それらの経験があったからこそ、一葉は空前絶後の女流作家となれたのだ、と言いたいのではなからうか。

(二) 井上ひさしの一葉像と世間一般の一葉像とのズレ

近代以降において作家を職業とする最初の女性として知られている一葉は、名作家としての一葉も悲劇のヒロインのように、「薄幸の作家」のレッテルを貼られた。「一葉は、すでに自我に生きようとするお関の、不遇と、矛盾と、苦悩をえがくことによって、そのような社会に生きる女性の、哀しみと嘆きをしみじみと読者に訴えている。」⁽¹⁷⁾ という不遇な一葉像が一九八三年に出版された『樋口一葉研究』から窺える。そして、「暗い運命を背負はされた女性から見る時、それは不都合だらけである。其処には明るさといふものが少しもない。其処に生きなければならぬ女性是不幸である。といふのが一葉の社會観であつた。」⁽¹⁸⁾ ということが一九八三年に出版された『樋口一葉論』に一葉像としてまとめられる。

その一方、鈴木 (2012) は、井上ひさしの一葉像が笑いに満ちた作品における独特な一葉像⁽¹⁹⁾ だと指摘している。そして、一九八四年の初演を見た観客が「一葉のみかたもいろいろあるんだなあ」「一葉学者がおこないかな」「一葉をみる目が変わったね」⁽²⁰⁾ などと感想を述べていることから、世間一般の一葉像と井上ひさしの一葉像のズレがわかる。

若くして父や兄に先立たれたのはなにもあなただけじゃないでしょう。結核で早死した娘さんもあなただけじゃないし、貧しい家の相続戸主にされた娘さんもあなただけじゃない。なのにどうして、あなただけが薄幸なんですか。ほかの娘さんたちはかわいそうじゃないんですか。わたしは、あなただ

(17) 松坂俊夫。『樋口一葉研究』。教育出版センター、1983年10月1日、第1刷、P28。

(18) 湯地孝。『樋口一葉論』。株式会社日本図書センター、1983年7月25日、第1刷、P450-451。

(19) 日本近代演劇史研究会編。鈴木彩。「頭痛肩こり樋口一葉——薄幸なく女性>作家像への批評」。『井上ひさしの演劇』。翰林書房、2012年12月1日、第1刷、P183。

(20) 日本近代演劇史研究会編。鈴木彩。「頭痛肩こり樋口一葉——薄幸なく女性>作家像への批評」。『井上ひさしの演劇』。翰林書房、2012年12月1日、第1刷、P184。

けを特別扱いして「かわいそー」の大合唱をするこの国の一葉研究者や女子
 大國文科の学生たちの浅薄な感傷主義に反撥しますね。⁽²¹⁾

一葉が特別ではないことを、井上ひさしは、単に庶民と比較して主張しているわけではなく、その論拠を示している。絶頂をきわめたその年の秋に世を去ったのは、不幸ではなくて、逆に、小説家としての理想の死である。代表作を書き上げたあとで、名前にまだ十分余光の残っているうちに生涯の幕を下ろしていることは、一流の作家の幸福だと思われる。太宰治も、三島由紀夫も、川端康成もそう考えているのだろう。

二〇〇四年十一月に、樋口一葉の肖像は五千円札の顔として採用された。それに関して、井上ひさしの力も入っていると考えられる。一九八四年に初演された『頭痛肩こり樋口一葉』は樋口一葉の人生を軽やかにより一層の深い理解を観客の目の前に置いて、数多くの観客に影響を与えた。さらに、一葉のほかにも、夏目漱石、石川啄木、太宰治、小林多喜二、魯迅などの文学家を主人公とした演劇『吾輩は漱石である』や『泣き虫なまいき石川啄木』、『虐殺組曲』、『人間合格』、『シャンハイ・ムーン』などにおいても、転覆的な作家像を作り上げたことと考え合わせると、井上ひさしが一貫して示した反権威・反体制的姿勢は『頭痛肩こり樋口一葉』にも現れたのではないかと思う。

つまり、井上ひさしの筆のもとにおいて、樋口一葉は、内面に葛藤を持ち、夢を持っている諦観的で明るい人間として描かれた。それによって、樋口一葉は明治時代から私達の生きている現代へとやってきた。

おわりに

上述のように、井上ひさしにおける一葉は、世間一般的に認められる悲劇の天才女流作家や、抑圧される女性とは違うように作られた。一見不幸に見える女性の一人にすぎないが、実際は夢が叶えた幸せな人生を送り、理想の死を遂げた。そして、短命に終わるが、短い生涯を輝かしく生きていた。こういうような一葉像は、井上ひさしが描いた独特な樋口一葉であり、従来の一葉像から逸脱し、井

(21) 井上ひさし、こまつ座編、『樋口一葉に聞く』、文春文庫、2003年3月10日、第1刷、P30。

上ひさしの一葉理解が伺える。一九八四年に初めて上演された『頭痛肩こり樋口一葉』も数多くの観客に影響を与え、従来樋口一葉への理解の変容を進めた。

井上ひさしが描いた樋口夏子は、自分の力を信じて、自分だけで生きていこうとした強い自意識に目覚めた性格の人間であった。戸主として家族を養う責任を負って、小説を書くことで自活することにした。生活のため苦勞をしていた夏子は肩が凝ったり、重いプレッシャーによってつねに頭がひどく痛くなったりするが、戸主と職業作家を両立させるためにずっと努力している夏子は、世間の波に負けなくて、最後に限りのない栄誉が与えられ、とうとう作家の「樋口一葉」に成長していった。確かにわずか二十四歳で亡くなった夏子は薄命であるが、従来の「薄幸の才女」と大きな違いがあり、自分の運命を左右できなくてもいいというような諦観で度量の広い人であった。

要するに、井上ひさしは従来の暗い一葉像をひっくりかえし、明るくて輝かしく生きた人間として一葉を理解している。このような素顔に迫る一葉理解は演劇という形によって、多くの観客に受け入れられた。それは時代を超えて、後世の一葉観に影響を与え、一葉研究者にも、一葉作品の読者にも、大きな示唆を与えよう。

参考文献

<テキスト及び研究著書>

- [1] 井上ひさし. 『頭痛肩こり樋口一葉』. 集英社文庫, 1988.
- [2] 井上ひさし. こまつ座編. 『樋口一葉に聞く』. 文春文庫, 2003.
- [3] 日本近代演劇史研究会編. 『井上ひさしの演劇』. 翰林書房, 2012.
- [4] 樋口一葉. 『一葉日記(抄)』. 新潮社, 1966.
- [5] 松坂俊夫. 『樋口一葉研究』. 教育出版センター, 1983.
- [6] 湯地孝. 『樋口一葉論』. 株式会社日本図書センター, 1983.
- [7] 大塚英志. 『定本物語消費論』. 角川文庫, 2001.

<論文及び劇評>

- [1] 時田浩. 女性6人のドラマ: 井上ひさしの『頭痛肩こり樋口一葉』. 『京都産業大学論集. 人文科学系列』, 2016年第49編.
- [2] 堂本正樹. 頭痛肩こり樋口一葉(井上ひさし・その言語宇宙の魅力<特集>)——(ドラマの世界・作品論). 『国文学解釈と鑑賞』, 1984年第49編第10号.
- [3] 宮岸泰治. こまつ座「頭痛肩こり樋口一葉」——明るい遊女たち(劇評). 『テアトロ』, 1984年第496編.
- [4] 野間正二. 井上ひさしの「頭痛肩こり樋口一葉」の世界. 『人文論集』, 1988年第24編第1号.

- [5] 小森陽一. 劇評喜劇が突きつける歴史認識：こまつ座「頭痛肩こり樋口一葉」. 『悲劇喜劇』, 2013年第66編第10号。
- [6] 今村忠純. 「頭痛肩こり樋口一葉」小論. 『悲劇喜劇』, 2006年第59編第12号。
- [7] 日比野啓. 怪しうこそ物狂ほしけれ：語り部=ヒステリー患者としての樋口一葉——井上ひさし『頭痛肩こり樋口一葉』論. 『国文学解釈と教材の研究』, 2004年第49編第9号。
- [8] 結城雅秀. 劇評/価値体系の極度の転換, そして狂気——文学座アトリエ=モーリー・スウィニー, 円=薔薇と海賊, こまつ座=頭痛肩こり樋口一葉, 自由劇場=ダム・ウェイター, 東京ギンガ堂=阿吽一女と胃袋, 燐=救いの猫ロリータはいま…, ピープルシアター=阿詩瑪. 『テアトロ』, 1996年第646編。
- [9] 大沢圭司. 人物配置の巧みさ——こまつ座「頭痛肩こり樋口一葉」, 音楽座「泣かないで」, 東京芸術座「12人の怒れる男たち」, 1980「行路死亡人考」, 博品館劇場「アーサー家のローズ」, NOISE「朝, 冷たい水で」, 青年団「東京ノート」(劇評). 『テアトロ』, 1994年第618編。
- [10] みなもごろう. 劇評舞台の上の時代と現在と——リアリティのありか演劇集団円=猫町、山の手事情社=印象タイタス・アンドロニカス、こまつ座=頭痛肩こり樋口一葉. 『テアトロ』, 1999年第685編。
- [11] 林尚之、宮内淳子. 演劇時評(1) 劇評頭痛肩こり樋口一葉象盲導犬非常の人何ぞ非常に：奇譚平賀源内と杉田玄白二都物語ワーニャ伯父さん香華ドレッサーストリッパー物語ヘレン・ケラー：ひびき合うものたち小野寺の弟・小野寺の姉極東の地、西の果て地下室の手記SOLID七月花形歌舞伎マシュー・ボーンの『ドリアン・グレイ』アトムへの伝言グラン・ヴァカンス遙か遠く同じ空の下で君に贈る声援2013三文オペラトクトワミー！. 『悲劇喜劇』, 2013年第66編第10号。
- [12] 熊谷真実、今村麻子. お八重さんが語る「頭痛肩こり樋口一葉」：熊谷真実さんに聞く. 『悲劇喜劇』, 2013年第66編第8号。